

”世知原っ子に「夢」と「笑顔」と「達成感」を”

夢をもち、心豊かで、たくましく生きる子どもを育成する



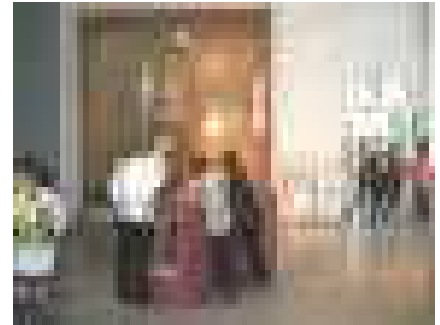
開 知

○笑顔いっぱい
○学びいっぱい
○元気いっぱい

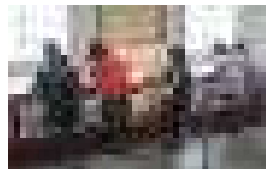
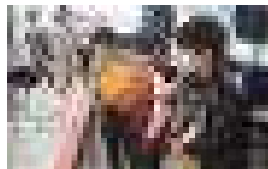
世知原小だより第38号 平成30年12月17日 文責 久保 克則

炭 鉱 資 料 館 を 見 学 し て

12月11日（火）、3年生の社会科の校外学習に参加しました。今回は「**世知原炭鉱資料館に展示されている昔の道具について、見学したり説明を読んで調べたりする。**」ことをねらいとして、「**世知原炭鉱資料館**」を見学しに行きました。



資料館の中は思った以上に広く、また天井がとても高かったので、とても見学しやすい雰囲気でした。資料館に入って最初に目にとまったのは、ほぼ中央に置かれた炭鉱で働いていた多くの方々の写真を集めた大きなパネルでした。そこには、男性はもちろんのこと、女性の姿もありました。まったく同じ仕事をされていたことが想像できました。**初期のころは、石炭を掘るのも人力、運び出すのも人力、とても過酷な仕事だと痛感しました。**また、周りには当時使われていた道具や服などが展示されていました。当初はほとんどが手作業で大変だったことが想像できました。また、**少し時代が立った後も、暗い中をヘルメットの上にある小さなライトの明かりを頼りに掘られており、どれだけ不安な気持ちで仕事をされていたか察することができます。**



この資料館は、元は松浦炭鉱の事務所だったそうです。明治35年に設立され、高島炭鉱とともに長崎県の主要炭

鉱として稼働していました。昭和45年の閉山まで山間の炭鉱町として大いに栄えたそうです。しかしながら、絶えず危険と隣り合わせだったと思います。

私は、平成14年4月1日付で、旧西彼杵郡外海町の池島に教頭として赴任しました。当時は、まだ池島鉱業所があり石炭を掘っていました。ただ、私が赴任する直前に坑内で大きな火災事故があり、しばらく操業を停止していました。**池島は720mほど下の鉱脈から石炭を採る海底炭鉱でした。ですから、火災が発生すると、消火の方法はただ一つ、坑口を素早く完全に封鎖をして自然消火させるのです。したがって、その鉱脈は二度と掘ることができなくなります。**そのこともあり、2年後には閉山することとなりました。当時は、もう大きな機械のドリルを使って、石炭を掘っていました。その点では、効率もよく安全だったと思いますが、ガスなどが溜まりやすかったり、海底なので岩盤が崩れたりするなどの危険はあり、緊張の中で仕事をされていたと思います。一度海底の坑内を見学する機会がありました。720mをエレベーター（岩盤すれすれを下るものでした。）で降り、そこから人車と呼ばれていた横に何とか2人が座れる小さな電車で8kmほど走り、そこから上り坂をマンベルトと呼ばれるベルトコンベアーに2回乗って、さらに歩いて400mほど行ったところに現場がありました。**こういう経験も子どもたちに伝えることができたらいいなあ**と思いながら見学した次第です。